山梨市文化財調査報告書　第5集

山梨市
市内遺跡発掘調査報告

1993～1996

1997.3

山梨市教育委員会

序

山梨市は、ナウマン象化石の出土から始まって、八幡地区・七日市場などの縄文時代の遺跡、岩下の古墳群、日下部の平安時代集落遺跡、連方屋敷をはじめとする中世の城館跡など、埋蔵文化財の宝庫です。大規模な開発はもちろんのこと、個人住宅の建築や個人農地の耕作など、小規模な開発とも、いかにして調整し、資料を残していくかが今後の課題と考えております。

この報告書は、国庫補助金を受けて実施した、個人住宅建築に伴う発掘調査や、各種確認調査の結果の概略をまとめたものです。個人住宅建築に伴うものは、遺跡が検出できないものが多く、試掘の数に比べて本調査が少なくなっておりますが、遺跡の範囲をより詳細に把握するには、「なにもない」ことも重要な成果になると思われます。

最後になりましたが、ご指導いただきました県教育委員会並びに近隣市町村教育委員会の方々、ご協力をいただきました関係各位に心より感謝申し上げ、あいさつといたします。

平成９年３月

山梨市教育委員会
教育長　向　山　保　雄

例　言

1　本書は、山梨県山梨市内に所在する「山梨市内遺跡」の発掘調査概要報告書で、緊急発掘調査の中でも主に個人住宅建築に原因を発するもの、及び各種開発に伴う遺跡の所在確認調査、またそれらの中で主要な遺跡の発掘調査概要を収録している。

2　調査は、国庫補助及び県費補助を受け、山梨市教育委員会が実施した。

3　本書における出土遺物及び図面・写真等は、山梨市教育委員会が保管している。

4　本書の執筆・編集は、山梨市教育委員会 三澤達也が行った。
なお、これらの作業を網蔵悦子、新田由岐が援けた。

調査に際しては、次の諸氏並びに諸機関のご教示・ご協力をいただきました。記して謝意を表します。（順不同、敬称略）

小野正文・保坂康夫・出月洋文・中山誠二（山梨県教育委員会学術文化課）、田代　孝・坂本美夫・森原明廣（山梨県埋蔵文化財センター）、宮澤公雄（帝京大学山梨文化財研究所）、室伏　徹（勝沼町教育委員会）、内田裕一（春日居町教育委員会）、飯島　泉（塩山市教育委員会）、大崎文裕（牧丘町教育委員会）

目　次

序
例言
第１章　調査の概要
　第１節　山梨市の遺跡とその環境 …… 1
　第２節　「山梨市内遺跡発掘調査事業」について …… 8
第２章　各遺跡調査概報
　第１節　宮ノ前遺跡 …… 13
　第２節　連方屋敷 …… 17
　第３節　植田遺跡 …… 22
　第４節　牧洞寺古墳 …… 24

挿図目次

第１図　山梨市全図 …… 3
第２図　山梨市遺跡地図 …… 7
第３図　調査箇所地図 …… 11
第４図　溝状遺構平面図・セクション図 …… 13
第５図　宮ノ前遺跡出土遺物実測図　14
第６図　集石遺構平面図 …… 18
第７図　集石遺構平面図 …… 22
第８図　墳丘地形・トレンチ設定図　25
第９図　牧洞寺古墳石室・トレンチセクション図 …… 26

図版目次

図版１　山梨市市街地航空写真
図版２ …… 15
図版３ …… 16
図版４ …… 19
図版５ …… 20
図版６ …… 21
図版７ …… 23
図版８ …… 27
図版９ …… 28

図版１　山梨市市街地航空写真

第１章　調査の概要

第１節　山梨市の遺跡とその環境

山梨市の地形・地質

甲府盆地は、日本列島の中央部に位置し、南に富士山、西に南アルプス、北に八ヶ岳・奥秩父連峰と、その周囲を3,000m級の山々に囲まれている。そして、外側から高山・中山・低山の山地、丘陵、低地と中心部に向かって漸次高度を減じている。山梨市は、逆三角形を呈する甲府盆地の北東部に位置し、西側が盆地北部に広がる山地の一部、東側が扇状地の低地という地形を成している。山地は、水ヶ森山地と呼ばれ、第三紀末に水ヶ森火山体を形成していたものが、開析が著しく進み、火山体の地形がほぼ完全に失われたものである。低地は、笛吹川扇状地と、兄川・弟川平野とに分けられる。笛吹川扇状地は、奥秩父に源を発する笛吹川によって形成されたもので、扇頂部では25m前後下刻されて段丘化しており、従来、それは請地面（甲府盆地第四紀研究グループ、1969）と呼ばれてきた。この扇状地を開析する崖は下流に向かって次第に低くなり、山梨市小原において、広い扇状地面に収斂する。これにより下流、とくに右岸側では旧網状流路跡が著しく、新しい時代の氾濫が頻繁であったことを示している。ここは武田信玄の時代に、釜無川・御勅使川に水防の主眼がおかれるまでは、甲府盆地一の水防の要地であった万力林にあたっている。請地面を形成する扇状地面の形成以降、笛吹川は下刻傾向に転じ、連続性のあまりよくない段丘面を開析谷中に残している。広い扇状地面は、甲府盆地底に埋没する勾配を示す。これは、甲府盆地および周辺地域の地殻変動によっていると考えられている。兄川・弟川平野は、水ヶ森火山を開析した比較的広い谷底部を占め、地表面勾配1/2°～3°の範囲が広い。兄川・弟川による段丘化した広い旧谷底面と現在の谷底平野（小規模断層によるものともいわれている。）、およびほぼ3°～8°ないしはそれ以上の勾配の開析小規模扇状地からなる。

山梨市内遺跡と歴史環境

山梨市内に点在する遺跡は、縄文時代から古代・中世・近世にわたり、88カ所が登録されているが、これは昭和52年に分布調査が行われ、昭和53年に作成された「山梨県遺跡地名表」及び昭和56年に作成された「全国遺跡地図 19 山梨県」によるものであり、独自の詳細分布調査は実施していない。そのため、遺跡の発見や湮滅した古墳、あるいは範囲の拡張及び絞り込みなどの変更が明確にされておらず、またそのほとんどが遺物の表面採集によっており、発掘調査によって確認されたものが少ないため、内容及び範囲が不明確なものが多い。（表１は「山梨県遺跡地名表」からの抜粋であるが、備考欄に現段階で把握している変更点及び試掘調査等の回数を記録している。）

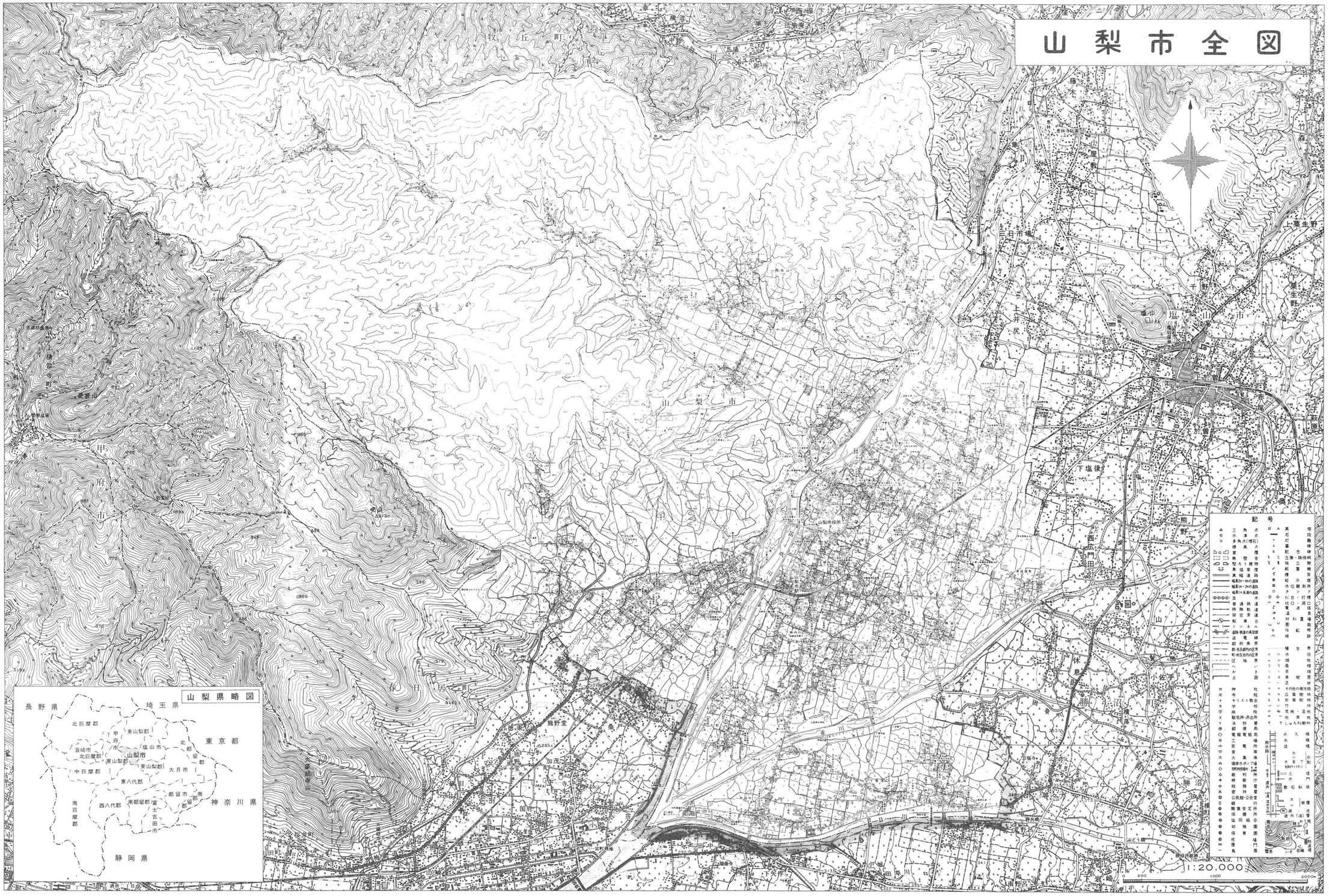
縄文時代の遺跡は、20カ所を数え、兄川・弟川平野の旧谷底面に立地するグループと笛吹川扇状地の扇央部付近に立地するグループ、市の東部の重川右岸で扇端部に立地するグループ、扇端部で笛吹川と重川とに挟まれた地域に立地するグループに大きく分けられるようである。そのほとんどが中期後半とされているが、平成5年度調査の宮ノ前遺跡からは中期初頭五領ヶ台式土器が、平成6年度調査の東後屋敷遺跡からは前期後半諸磯c式土器が出土している。

弥生時代の遺跡は確認されていない。

古墳時代の遺跡は、盆地北縁の水ヶ森山地の緩斜面上に点在する岩下古墳群、市中央部上神内川地区に分布する古墳と散布地、市南部の日川地区に分布する古墳と散布地が確認されている。古墳はいずれも横穴式石室を有する後期古墳で、石室の長さは大きいもので10mを越える。岩下古墳群が位置する上岩下地区は、西側で春日居町と接しており、甲府市横根・桜井地区から石和町、春日居町にかけて、盆地北縁の山地斜面に点在する積石塚群や白鳳期の古瓦が出土している寺元廃寺とも近接するため、これらの事業を成し遂げた勢力との関係は注目されるところである。

奈良・平安時代の遺跡は、山地部を除く市内のほぼ全域に分散しているが、市中央部から北よりの小原地区の密度が濃いようである。本県考古学史の中でも先駆的な調査となった日下部遺跡の発掘調査は、戦後昭和24年～25年に行われ、平安期の竪穴住居址29軒と掘立柱建物址が発見されたほか土師器・須恵器・灰釉陶器・鉄器・銙帯金具等遺物も多数出土している。市北部で笛吹川扇状地の扇央部に位置する七日子遺跡では平安期の竪穴住居址4軒などが発見された。兄川・弟川平野の谷底平野中央部付近に位置する江曽原遺跡では、多数の動植物遺体が検出されたことで注目をあびた。水ヶ森山地から南西に延びる支稜線の末端が、笛吹川の右岸付近までせり出している山地斜面上に立地する荒神山窯跡では、昭和61年に行われた発掘調査により、窯跡の可能性のある遺構3～4基が検出され、出土遺物の検討からそれらの時期として11世紀前半及び11世紀後半～12世紀前半が考えられている。

正倉院所蔵の調庸白絁金青袋には「甲斐国山梨郡可美里日下部□一匹和銅七年(714)十月」とあり、これが郡名史料の初見であるが、山梨郡可美里（加美郷）に比定される範囲は、山梨市の中心以北・牧丘町・三富村・塩山市の一部が考えられている。『和名抄』甲斐国山梨郡に記載された郷は、於曽・能呂・林戸・井上・玉井・石禾・表門・山梨・加美・大野があり、このうち現在の山梨市域に入るのは山梨・加美・大野で、玉井も山梨市八幡・日下部地区あたりとする説もある。山梨市上下栗原地区は、栗原郷に比定されているが、『和名抄』では栗原郷は巨麻郡に含まれており、飛地の可能性が指摘されている。いずれにせよ、栗原郷もその隣の等々力郷も、地理的には山梨郡に入り、甲斐31郷のうち12郷が山梨郡地区にあることになり、人口が集中していたことが窺われる。

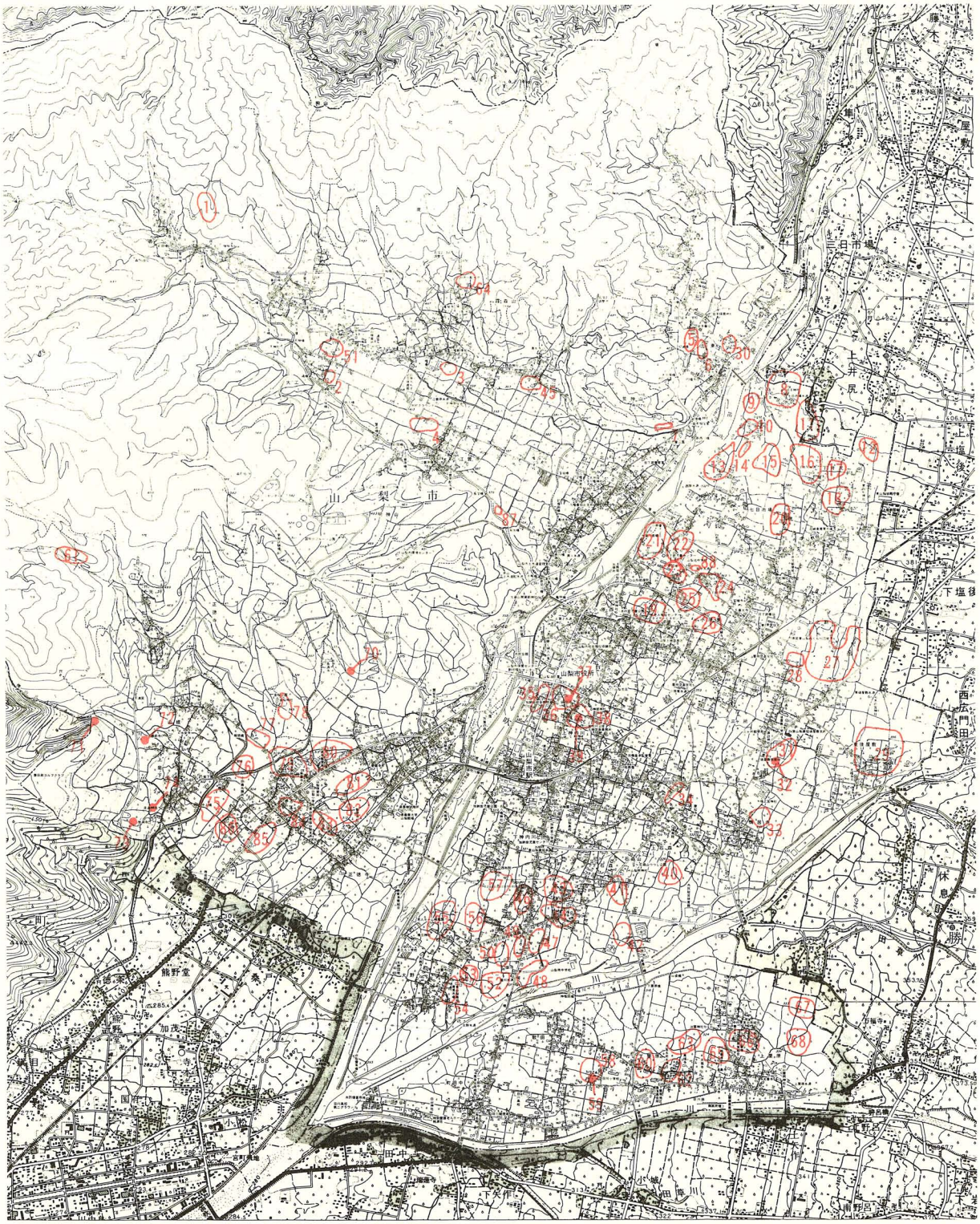


第1図　山梨市全図

表1　山梨市遺跡地名表

番号	遺跡名	種別	所在地	時代	備考
1	堂平遺跡	散布地	山梨市水口堂平	平安	
2	大工南　〃	〃	〃　大工	縄文・平安	
3	市川西　〃	〃	〃　市川	〃	
4	江曾原　〃	集落跡	〃　江曾原	縄文・古墳	
5	村西　〃	散布地	〃　岩手字村西	縄文	
6	久保　〃	〃	〃　〃　久保	平安	
7	中下西　〃	〃	〃　〃　中下	〃	
8	宮ノ前　〃	〃	〃　七日市場字宮ノ前	縄文・奈良平安	4
9	上川窪　〃	〃	〃　〃　上川窪	縄文・平安	
10	下弥勤　〃	〃	〃　〃　下弥勤	〃	
11	宮ノ前南　〃	〃	〃　〃　宮ノ前南	縄文・奈良平安	
12	石原　〃	〃	〃　下井尻字石原	縄文	
13	天神原　〃	〃	〃　七日市場字天神原	平安	
14	西ノ久保　〃	〃	〃　〃　西ノ久保	〃	
15	中沢　〃	〃	〃　〃　中沢	〃	1
16	十王堂　〃	〃	〃　下井尻字十王堂	〃	1
17	阿弥ダ堂　〃	〃	〃　〃　阿弥ダ堂	奈良	
18	宮ノ西　〃	〃	〃　〃　宮ノ西	〃	1
19	安田氏館跡	館跡	〃　小原西字八王字	鎌倉	3
20	東原遺跡	散布地	〃　七日市場字東原	奈良	
21	立司　〃	〃	〃　小原東字立司	奈良・平安	
22	大泉庵　〃	〃	〃　〃　大泉庵	縄文・平安鎌倉	1
23	原堰　〃	〃	〃　〃　原堰	奈良・平安	1
24	大堀北遺跡	散布地	山梨市小原東字大堀	奈良・平安	7
25	大堀東　〃	〃	〃　〃　大堀	〃	2
26	大堀南　〃	〃	〃　〃　大堀	平安	1
27	三ヶ所　〃	〃	〃　三ヶ所	〃	
28	連方屋敷跡	館跡	〃　〃	鎌倉	2
29	東後屋敷遺跡	散布地	〃　東後屋敷	縄文・奈良平安	5
30	久保田　〃	〃	〃　岩手字久保田	縄文	
31	野田　〃	〃	〃　三ヶ所野田	古墳	
32	ふじ塚古墳	古墳	〃　〃　〃	〃	円墳？埋滅
33	鴨居寺遺跡	散布地	〃　鴨居寺	〃	
34	上手原　〃	〃	〃　上石森字上手原	縄文	1
35	日下部病院前遺跡	〃	〃上神内川	古墳	
36	平塚　〃	〃	〃　〃　字平塚	古墳・平安	1
37	平塚古墳	古墳	〃　〃　〃　1075	古墳	円墳
38	塚越遺跡	散布地	〃　〃　字塚越	〃	1
39	稲荷塚古墳	古墳	〃　〃　〃　1010	〃	円墳
40	上黒木遺跡	散布地	〃　上石森字上黒木	平安	
41	屋敷　〃	〃	〃　下石森字屋敷	〃	1
42	道下　〃	〃	〃　〃　道下	〃	
43	林ノ上　〃	〃	〃　〃　林ノ上	縄文	
44	添森　〃	〃	〃　〃　添森	縄文・平安鎌倉	

番号	遺　跡　名	種別	所　在　地	時　代	備　考
45	市川東　〃	〃	〃　市川	縄　文	
46	宗高北　〃	〃	〃　下石森字宗高	平　安	
47	宗高東　〃	〃	〃　〃　〃	縄　文	4
48	雲　林　〃	〃	〃　〃　雲林	古墳・平安	2
49	宗高南　〃	〃	〃　〃　宗高	弥生・古墳	
50	宗高西　〃	〃	〃　〃　〃	古　墳	2
51	大工北　〃	〃	〃　大工	平　安	
52	天神前東　〃	〃	〃　大野字天神前	〃	
53	天神前北　〃	〃	〃　〃　〃	〃	
54	天神前西遺跡	散布地	山梨市大野字天神前	古墳・平安	
55	榎　田　〃	〃	〃　〃　榎田	平　安	2
56	寺　前　〃	〃	〃　〃　寺前	〃	
57	杉　木　〃	〃	〃　〃　杉木	古　墳	
58	松　畑　〃	〃	〃　歌田字松畑	奈　良	1
59	琵琶塚古墳	古　墳	〃　〃	古　墳	
60	紺　屋　遺　跡	散布地	〃　下栗原字紺屋	弥生・平安 古　墳	
61	永晶院西山遺跡	〃	〃　矢坪	平　安	
62	宮　後　遺　跡	〃	〃　下栗原字宮後	〃	2
63	北川後　〃	〃	〃　〃　北川後	〃	
64	市川北　〃	〃	〃　市川	縄　文	1
65	西　田　〃	〃	〃　下栗原字西田	平　安	
66	西小路　〃	〃	〃　中村字西小路	縄文・平安	1
67	大林北　〃	〃	〃　上栗原字大林	縄　文	
68	大林南　〃	〃	〃　〃　〃	平　安	
69	富士塚　〃	富士塚	〃　万力	平安・鎌倉	
70	蟹沢古墳 （長源寺前古墳）	古　墳	〃　万力字相平場3130	古　墳	
71	観音塚古墳 （夕狩沢古墳）	〃	〃　上岩下字妙見平1595－43	〃	
72	山　寺　古　墳	〃	〃　上岩下字蟹田745	〃	
73	牧洞寺　〃	〃	〃　〃　牧洞寺畑	〃	
74	天神塚　〃	〃	〃　〃　天神山	〃	
75	武　家　遺　跡	散布地	〃　〃　武家	平　安	1
76	中　沢　〃	〃	〃　落合字中沢	〃	
77	池　保　〃	〃	〃　〃　池保	〃	
78	金　桜　〃	〃	〃　〃　金桜	〃	
79	延命寺　〃	〃	〃　〃　延命寺	弥生・古墳	
80	原　前　〃	〃	〃　〃　原前	奈　良	2
81	岩　間　〃	〃	〃　正徳寺字岩間	平　安	1
82	宮　田　〃	〃	〃　〃　宮田	〃	
83	天 神 前 遺 跡	散布地	〃　正徳寺字天神前	平　安	
84	屋　敷　〃	〃	〃　落合字屋敷	〃	3
85	前　田　〃	〃	〃　〃　前田	弥生・奈良	1
86	半　座　〃	〃	〃　〃　半座	平　安	
87	江曾原史前 遺物包蔵地	その他	山梨市 江曾原字ヤナ崎（兄川河床）	先　土　器	
88	日 下 部 遺 跡	集落跡	山梨市七日市場字大泉庵 （山梨北中校庭）	奈良・平安	
89	植　田　遺　跡				H3.12.26 発見届


山梨市
熊野堂
加茂
国府
上井尻
上塩後
下塩後
西広門田
休息
藤木
小屋敷
三日市場
日川
田幕川
南野呂
下矢作
小城
田中
上矢作

第２図　山梨市遺跡地図

中世の遺跡としては、県指定史跡連方屋敷・安田氏館跡（想定地）の２件の館跡が指定されているのみで、大野砦・栗原氏館・城伊庵屋敷などの城館跡及び烽火台は未指定となっている。連方屋敷は、平成５年度に一部が発掘調査され、12世紀末～13世紀初頭にあたると思われる常滑甕の口縁部破片が出土している。

第２節　「山梨市内遺跡発掘調査事業」について

山梨市では、平成５年度以降、土木工事等の開発行為に伴う埋蔵文化財の発掘調査が行われており、平成６年度より、国庫補助及び県費補助を受けて、①個人住宅建築に伴う緊急対応の発掘調査、②区画整理事業に伴う遺跡の所在確認調査、③各種の開発に伴う遺跡の所在確認及び範囲確認調査、④零細業者等による開発に伴う緊急対応の発掘調査（平成８年度より）の４つの項目を目的として市内の埋蔵文化財包蔵地の発掘調査を行っている。

個人住宅建築に伴うものは、年間10件ほどの届出があるが、そのほとんどが試掘及び立会調査で、本調査に至るものは１・２件ほどである（表２参照）。これは、ａ包含層と掘削面との間に一定以上の間層が確保できる場合は保存する。ｂ旧宅地造成の際に撹乱を受けている。ｃ果樹栽培による撹乱を受けている。ｄ包蔵地の範囲が不明瞭。ｅ掘削の範囲が狭く、試掘で終わってしまう。という理由によるものである。ｃの場合、本市は果樹栽培が盛んで、特に桃栽培では２回以上木の代替えを行っているところがほとんどで、抜根の際に１ｍ以上掘り込んでいるため、ローム面までが50㎝程度の笛吹川扇状地では３代目以降になると絶望的である。平成７年度には個人農地の耕作を原因とする発掘調査も行っている（ただし、所有者からの届出に基づくものである。）。

②については、平成６年度に山梨市駅前区画整理事業に伴う所在確認調査を実施している。③については、平成６年度に市老人健康福祉センター、市道落合桑戸線、平成７年度に都市計画道路山梨市駅東山梨線、山梨日川農協共選所の所在確認及び範囲確認を行っている。

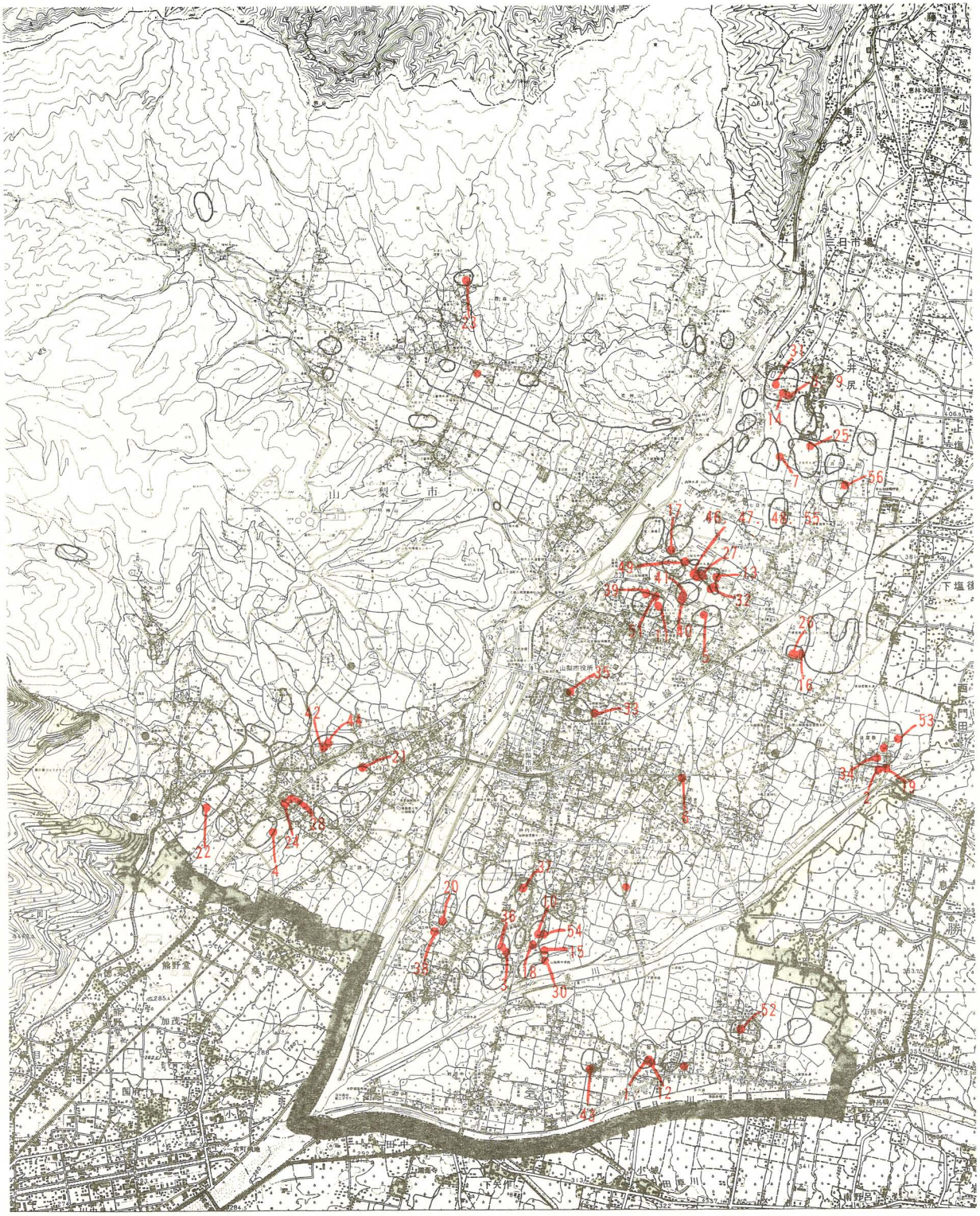
表２　個人住宅発掘届・発掘調査件数等一覧表

摘要＼年度		平成５	平成６	平成７	平成８
57条の２発掘届（個人住宅）		16	10	11	5
	発掘調査（本調査）	2	1	1	1
	試掘調査	0	1	7	2
	立会調査	14	8	3	2

表3　立会・試掘・本調査一覧表（法57条の2届出に基づくもの）

年度	No.	遺跡名	原因	立会・試掘・本調査	結果
平成五年度	1	宮後	個人住宅	立会	遺物・遺構ともになし
	2	東後屋敷	〃	〃	〃
	3	宗高西	店舗	〃	〃
	4	前田	個人住宅	〃	〃
	5	大堀南	〃	〃	〃
	6	上手原	〃	〃	〃
	7	中沢	〃	〃	〃
	8	宮ノ前	〃	本調査	溝状遺構・縄文土器・土偶
	9	〃	〃	〃	〃
	10	宗高東	〃	立会	遺物・遺構ともになし
	11	安田氏館跡	事務所(プレハブ)	試掘	〃
	12	宮後	個人住宅	立会	〃
	13	大堀北	共同住宅	試掘	〃
	14	宮ノ前	個人住宅	立会	〃
	15	雲林	貸住宅	試掘	〃
	16	連方屋敷	個人住宅	本調査	集石遺構・内示土器・常滑
	17	大泉庵	〃	立会	遺物・遺構ともになし
	18	宗高東	〃	〃	〃
	19	東後屋敷	〃	〃	〃
	20	榎田	〃	〃	〃
平成六年度	21	岩間	〃	〃	〃
	22	武家	〃	〃	〃
	23	市川北	〃	〃	〃
	24	屋敷	〃	〃	〃
	25	十王堂	〃	〃	〃
	26	連方屋敷	〃	本調査	関連するものなし
	27	大堀北	〃	試掘	遺物・遺構ともになし
	28	屋敷	〃	立会	〃
	29	〃	共同住宅	〃	〃
	30	雲林	〃	試掘	〃
	31	宮ノ前	電柱	立会	〃
	32	大堀北	共同住宅	試掘	遺物・遺構ともになし

年度	No.	遺跡名	原因	立会・試掘・本調査	結果
	33	塚越	個人住宅	立会	〃
	34	東後屋敷	〃	〃	〃
平成七年度	35	平塚	貸住宅	〃	〃
	36	宗高西	個人住宅	〃	〃
	37	宗高北	〃	試掘	〃
	38	榎田	〃	〃	〃
	39	安田氏館跡	〃	〃	〃
	40	大堀東	〃	立会	〃
	41	〃	〃	〃	〃
	42	原前	〃	試掘	〃
	43	松畑	共同住宅	〃	〃
	44	原前	寄宿舎	〃	〃
	45	植田	個人農地	本調査	集石遺構・縄文土器
	46	大堀北	個人住宅	試掘	遺物・遺構ともになし
	47	〃	〃	〃	〃
	48	〃	〃	〃	〃
	49	原堰	店舗併用住宅	〃	〃
平成八年度	50	屋敷	個人住宅	〃	〃
	51	安田氏館跡	〃	〃	〃
	52	西小路	〃	立会	〃
	53	東後屋敷	〃	本調査	〃
	54	宗高東	共同住宅	試掘	〃
	55	大堀北	〃	〃	〃
	56	宮ノ西	個人	立会	〃

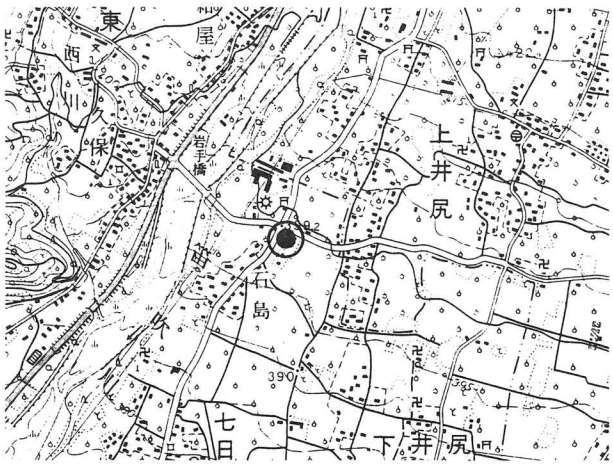

山梨市
上井尻
上塩後
下塩後
西広門田
三日市場
藤木
小屋敷
山梨市役所
熊野堂
加茂
小原
下矢作
南野呂
小原西川
田中
休息
勝

第３図　調査箇所地図

第２章　各遺跡調査概報

本章では、個人住宅建築に原因を発する緊急発掘調査の中で本調査に至ったもの、古墳整備に伴う墳丘等現状確認調査の概略を報告するものとする。

第１節　宮ノ前遺跡



所 在 地　山梨市七日市場字東宮ノ前南1040番地

調査原因　分譲宅地造成及び個人住宅建築

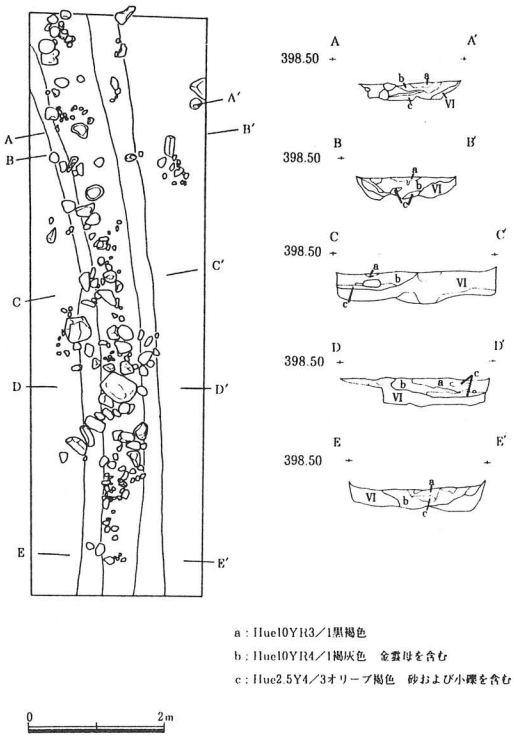
調査期間　平成５年８月17日～９月13日

調査面積　105㎡

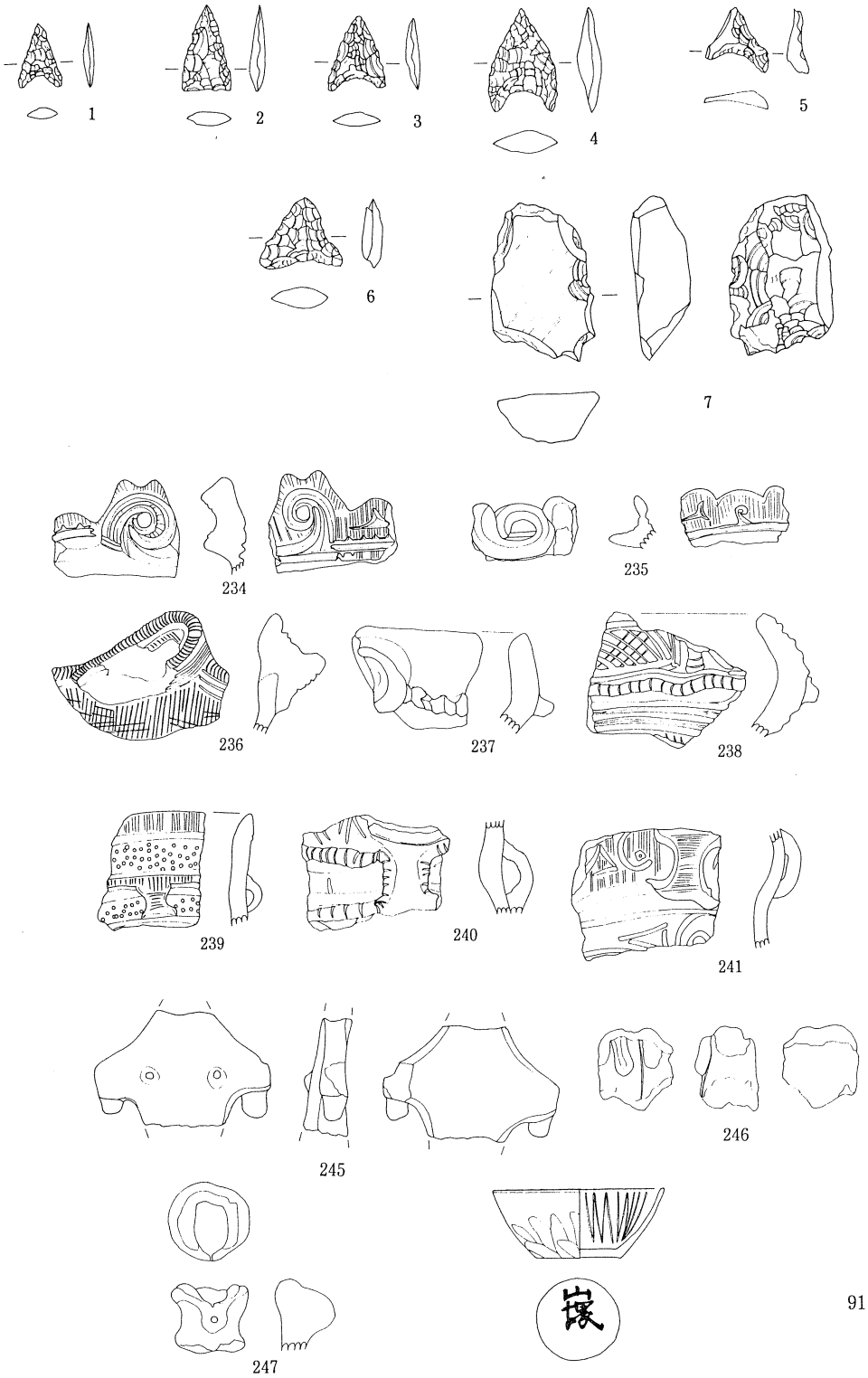
調査主体　山梨市教育委員会

平成５年８月３日及び８月19日、２区画分の分譲宅地造成に伴う文化財保護法第57条の２による届出がなされた。当該地は、踏査の段階で土器が多量に表面採集されたことから、地下に遺跡が存在する可能性が高いと思われる地区であった。平成５年８月26日、県教育委員会より発掘調査を行わなければならない旨の通知がなされ、文化庁へ発掘通知を提出し、平成５年８月17日より調査が開始された。調査地は笛吹川扇状地の扇央部付近に立地し、標高は399ｍを測る。調査地の西約300ｍには笛吹川が流れ、その両岸には部分的に河岸段丘地形がみられる。

検出された遺構・遺物は、平安期のものと思われる溝状遺構が１条と、墨書のある土師器杯および多量の縄文土器・石器であった。土師器杯は甲斐型土器編年のⅧ期に当たると思われる。縄文土器は、接合するものはほとんどないが、ほぼ全てが五領ヶ台式期のもので、伴出した土偶は、県内では最も古い段階のものである可能性がある。(1)



第４図　溝状遺構平面図・セクション図



第５図　宮ノ前遺跡出土遺物実測図

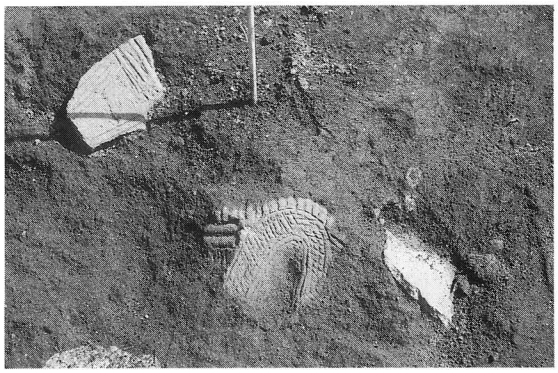
調査前

溝状遺構セクション

溝状遺構

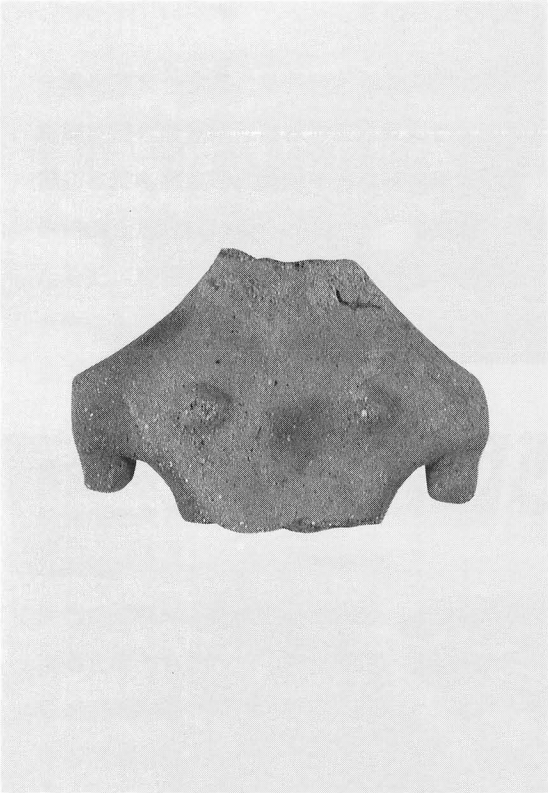
溝状遺構（完掘）

遺物出土状況 1

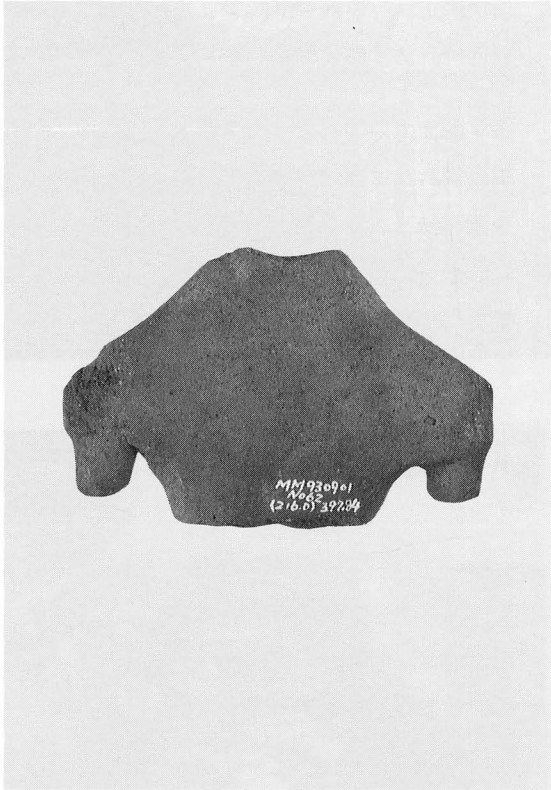


遺物出土状況 2

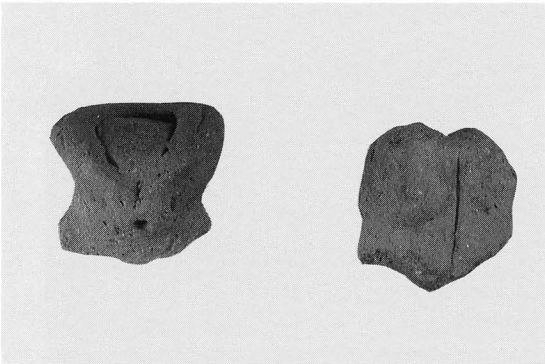
図版 2



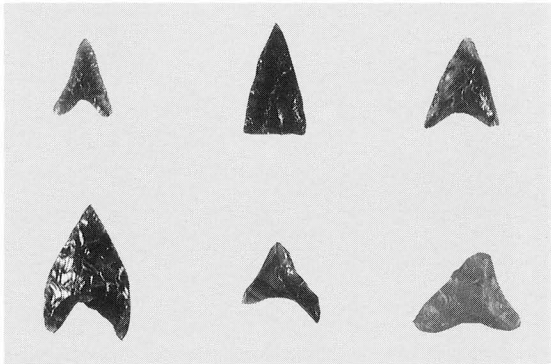
土偶（正面）



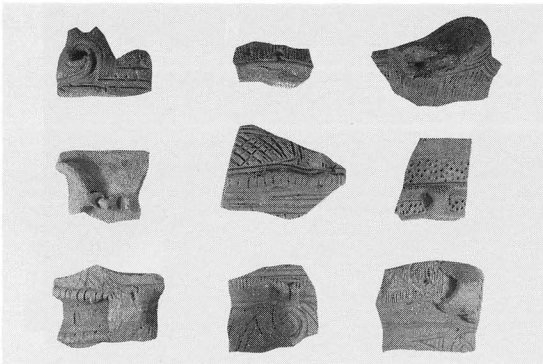
土偶（裏面）



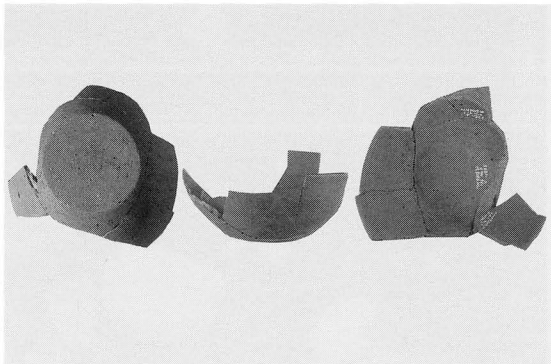
土　偶



石　鏃



縄文土器



土師器

図版 3

第２節　連方屋敷

所 在 地　山梨市三ヶ所757番地
調査原因　個人住宅建築
調査期間　平成６年３月15日～
　　３月31日
調査面積　144㎡
調査主体　山梨市教育委員会

連方屋敷は、築造年代、築造者が不明の、一辺が約100ｍの不整四角形の屋敷で、土塁や堀が今なお残存し、県指定史跡に指定されている。平成６年１月28日、屋敷内に居住する古屋貴章氏から、住宅建て替えのための現状変更許可申請及び文化財保護法第57条の２による発掘届が提出された。平成６年２月15日、県教育委員会から条件付許可の通知がなされ、現住宅取り壊し後、新築部分全面の発掘調査を実施することになった。これを受け、市教委では平成６年１月28日に発掘通知を提出し、平成６年３月15日より調査が開始された。

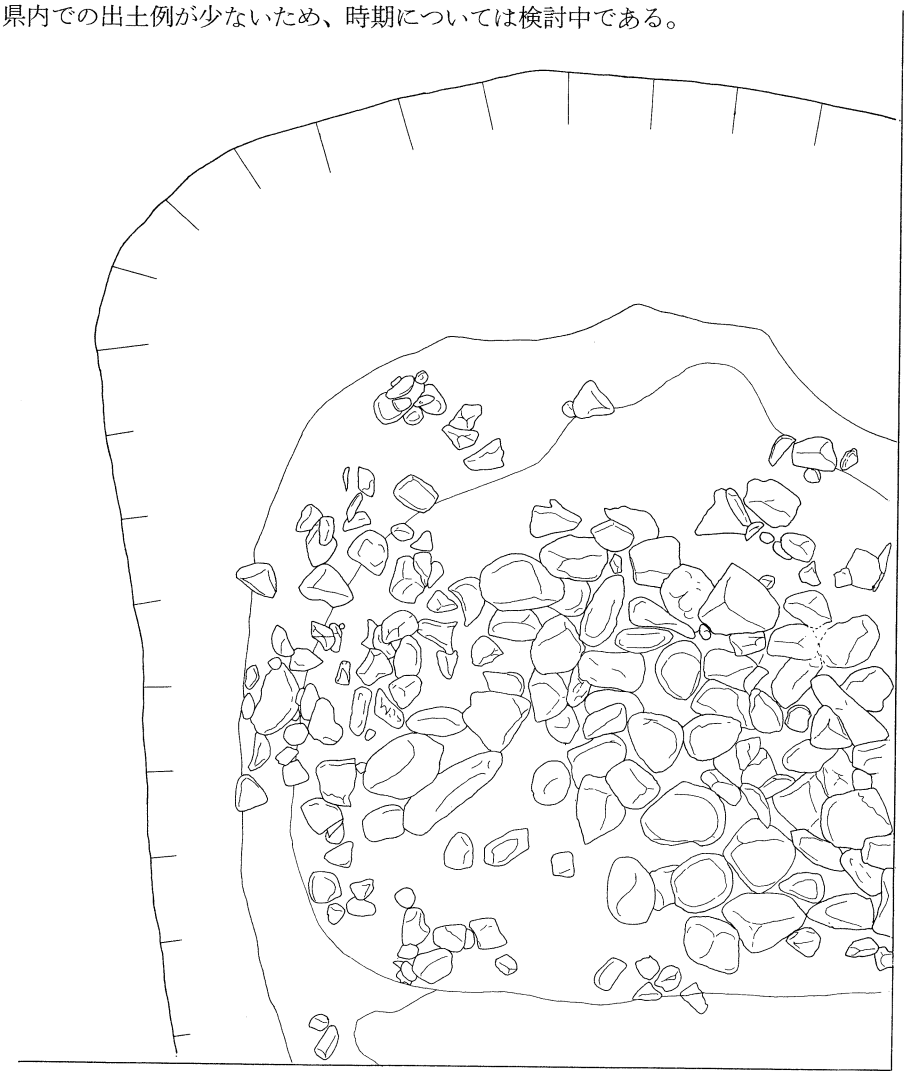
連方屋敷は、山梨市の中心部からやや北東よりで、ＪＲ中央本線東山梨駅の東100ｍほどに位置する。駅の西には青梅街道が南北に走り、そこには舟形状に道幅が広がった、中世この地方で最も栄えたといわれる八日市場跡がある。さらに屋敷の中央から南に道が伸びており、その両側に短冊状の町家が並び、新町という地名が残っている。ここでも市が開かれ、徳川の支配になってから馬市もあったという。この道は、一宮浅間神社までほぼ直線状につながっている。また道者街道に比定される道も付近を通っており、この地域が交通、経済上の要所であったことが窺える。

連方屋敷について、『甲斐国志』は、武田氏時代の蔵前衆頭古屋氏の屋敷であった可能性を示唆し、上野晴朗氏はさらに、当地域の蔵前の庁所と推定している。また上野氏は、連方屋敷の名の由来を、安田義定の九代目の安田孫左右衛門尉光泰が連峯入道を名のり、この屋敷に住したことによるとしている。近接する八日市場には安田義定館跡ともいわれる保田山妙音寺・安田山西願寺があり、真北には安田氏の墓所のある雲光寺もあり遠くない。また、屋敷の鬼門にあたる北東には、足利尊氏が夢窓疎石を開山として1333年に創立したと伝えられる清白寺が近接している。なお、清白寺の周辺一帯は、灰釉陶器が表面採集されており、周知の埋蔵文化財包蔵地に指定されている。屋敷を巡る土塁は、北東の隅と南側の一部が欠いており、規模は基底部が８～15ｍ、高さ２～３ｍで、西辺から北辺にかけての土塁が最も大きい。

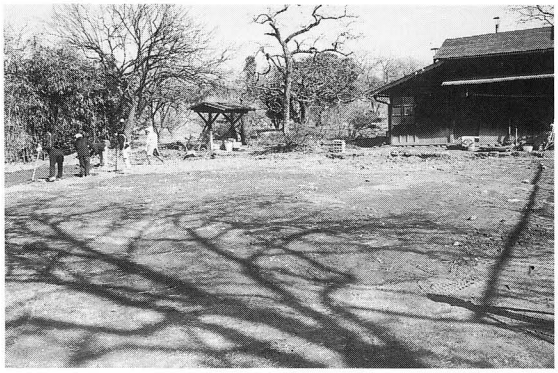
調査地は、屋敷内に３軒並んだ古屋氏のうち東側の古屋氏の住宅地で、屋敷南東隅の土塁の内側に位置する。旧住宅を取り壊した後、土層観察用のベルトを南北方向に２本、東西方向に１本残し、南北８ｍ、東西18mの長方形の範囲を人力によって掘り下げた。

発見された遺物・遺構は、江戸末～明治初頭といわれる旧住宅建築に伴うものと推定される地鎮具、屋敷に関連すると思われる集石遺構と内耳土器、常滑の破片が出土している。

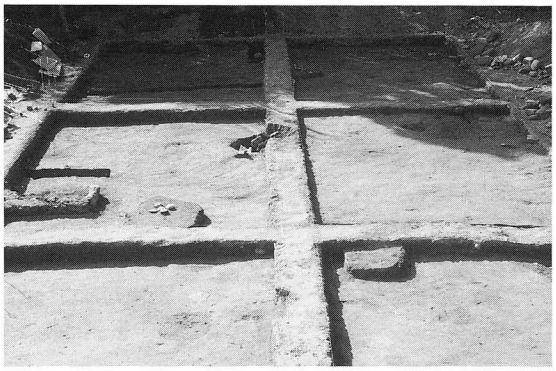
集石遺構は直径５ｍ、深さ80　の落ち込みの中に人頭大の石材が充積しており、内耳土器の破片が混入している。性格は不明である。また、落ち込みの西側の上端付近で、ブロック状に炭化米が出土し、その中から常滑の甕口縁部が出土した。これは、口縁部の形状から13世紀末～14世紀初頭に生産されたものと思われる。[2]内耳土器は、厚手の深鍋形で、県内での出土例が少ないため、時期については検討中である。



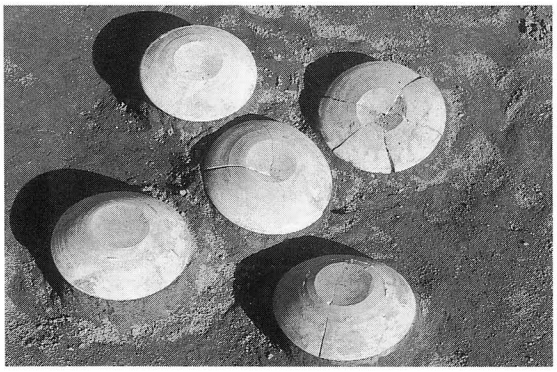
第６図　集石遺構平面図



調査前



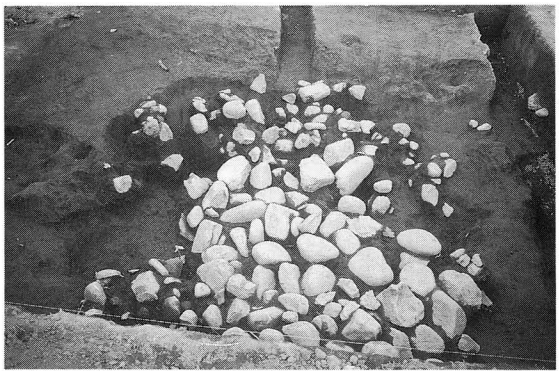
調査区全体



地鎮具

地鎮具（展開）

集石遺構
図版 4

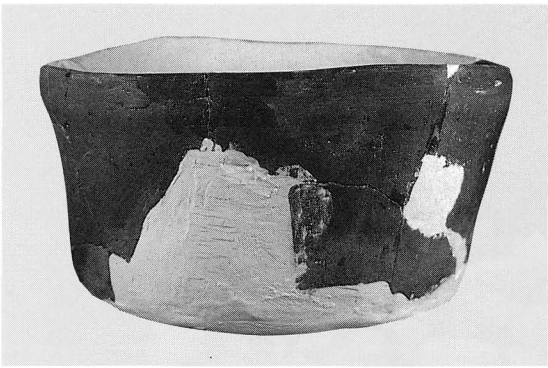


集石遺構（南から）

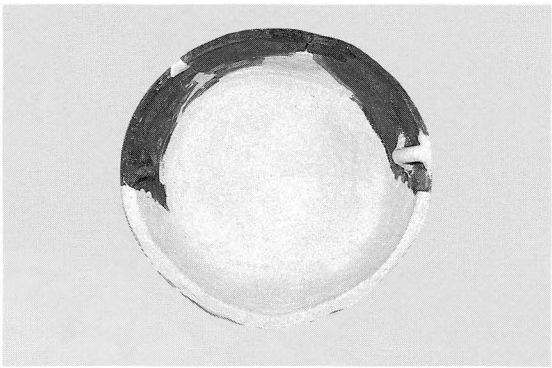
集石遺構（石材除去後）

遺物出土状況（常滑）

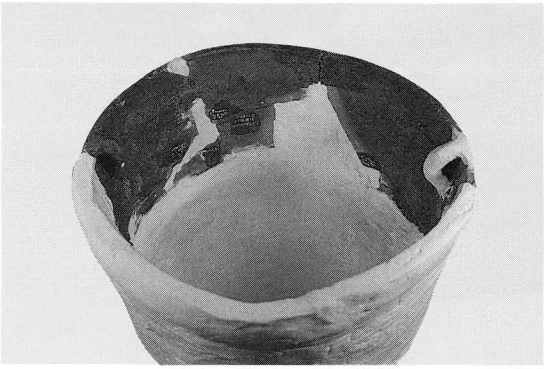
遺物出土状況（かわらけ）



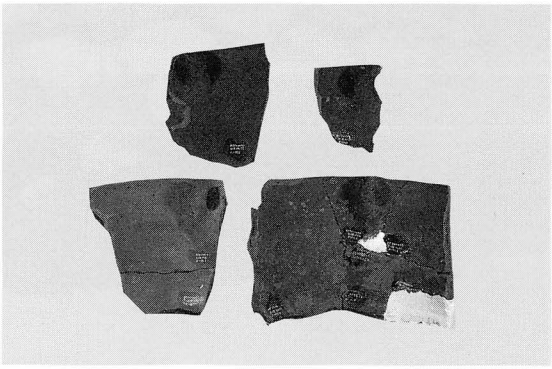
内耳土器 1



内耳土器 1

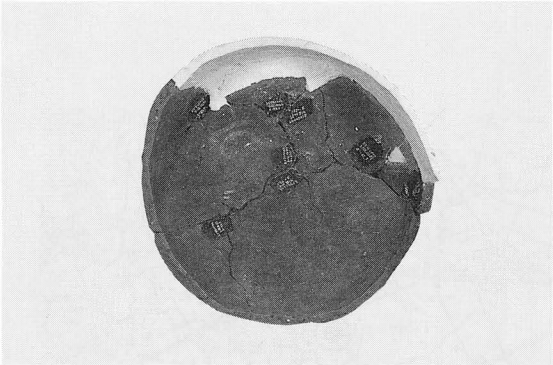


内耳土器 1

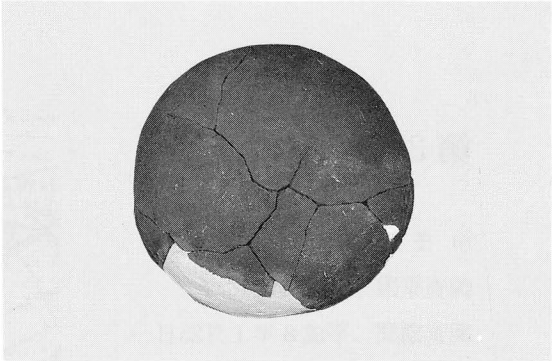


内耳土器 2

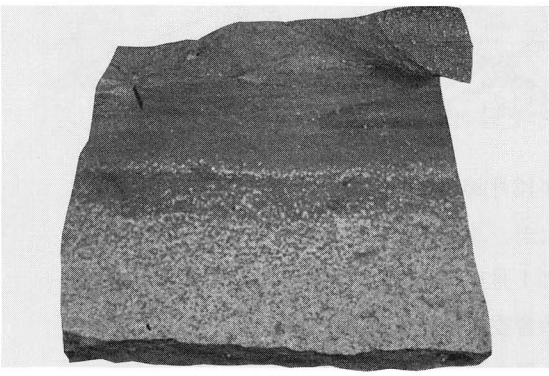
図版 5



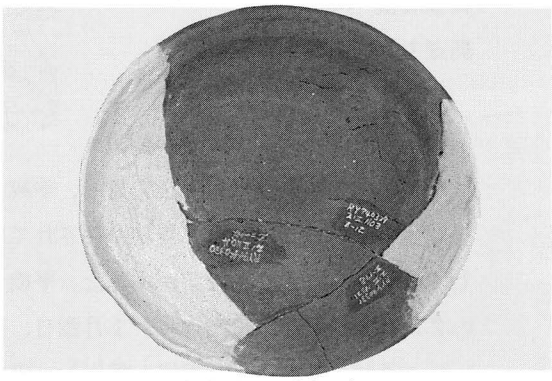
内耳土器（底部）



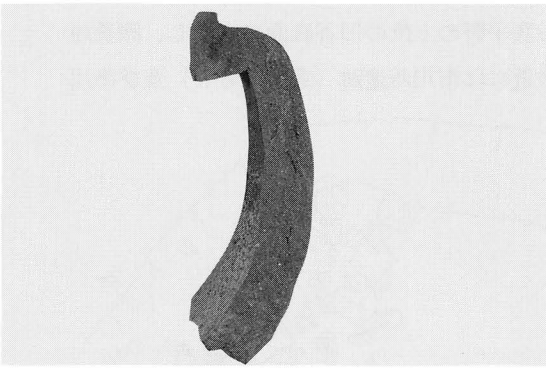
内耳土器（底部）



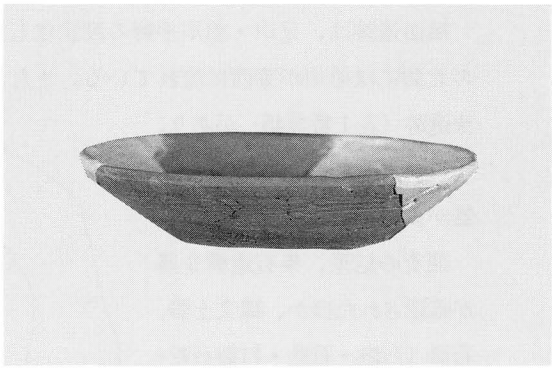
常滑甕頸部（裏面）



かわらけ（内面）

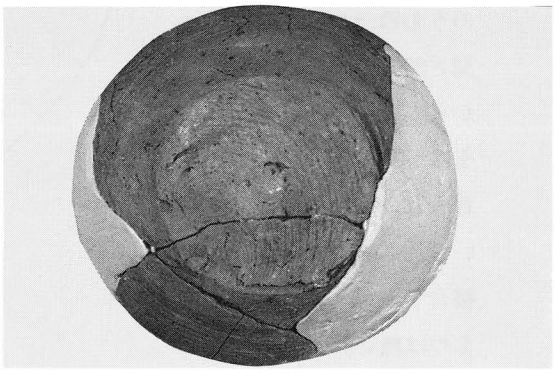


常滑甕頸部（断面）



かわらけ（体部）

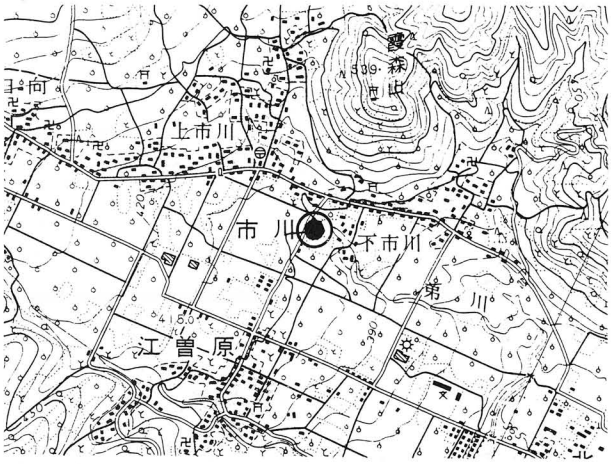
常滑甕頸部（裏面）



かわらけ（外面）

図版 6

第３節　植田遺跡

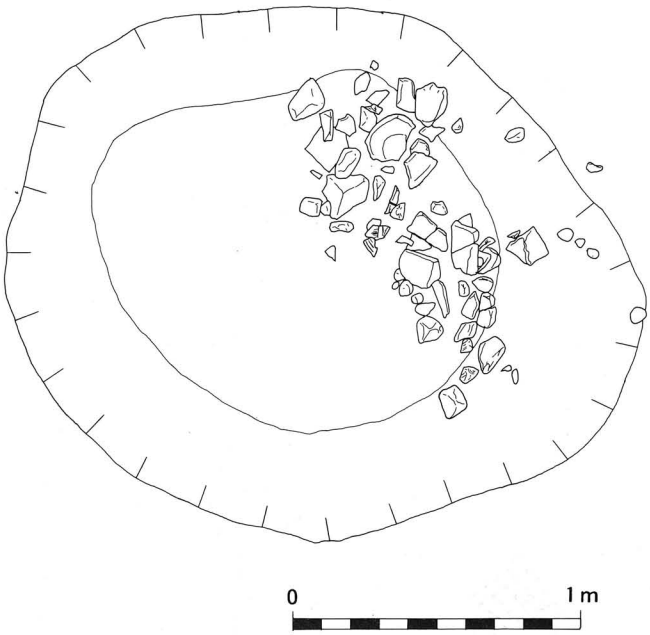


所 在 地　山梨市市川895
調査原因　個人農地
調査期間　平成８年１月25日～
　　２月15日
調査面積　80㎡
調査主体　山梨市教育委員会

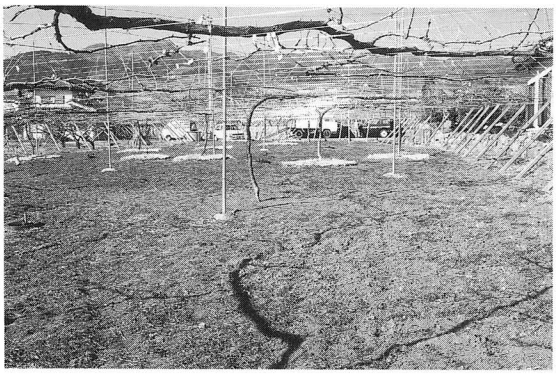
植田遺跡は、山梨市市川の杉田浩氏が耕作中に土器の破片を発見し、平成３年12月26日に発見届が出された遺跡で、その後ビニールシートで被覆し現状保存されていたが、ぶどう栽培の施肥作業に支障があるとして、市教育委員会に相談があった。平成８年１月10日に杉田氏から文化財保護法第57条の２による発掘届が提出され、１月22日、県教育委員会より発掘調査をしなければならない旨の通知がなされ、発掘届を提出し、平成８年１月25日から２月15日まで調査が行われた。

植田遺跡は、兄川・弟川平野の段丘化した谷底平野の上位の旧谷底面に立地し、調査地の北側には弟川が東西に流れている。また、付近には市川西遺跡（表１番号３）及び市川東遺跡（表１番号45）があり、両遺跡とも縄文時代中期の土器が表面採集されている。

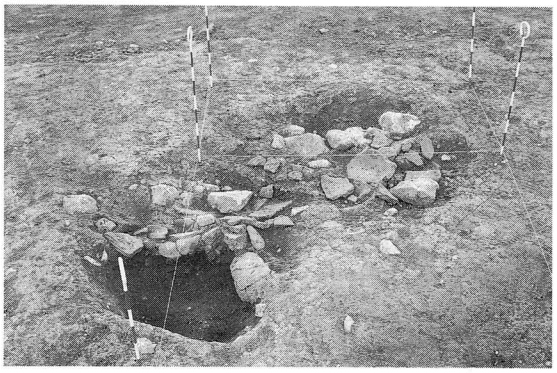
調査の結果、集石遺構２基が確認されたほか、縄文土器、石器（石鏃・石匙・打製石斧・石皿）が出土した。集石遺構のうちの一つは、直径２ｍ、深さ80㎝の土坑の表層に拳大から人頭大の石材が集石し、土器が混入している。土器は、曽利Ⅱ式期のものが主体で、いずれも破片であり、一部は接合するが全体が復元できるものは無い。



第７図　集石遺構平面図

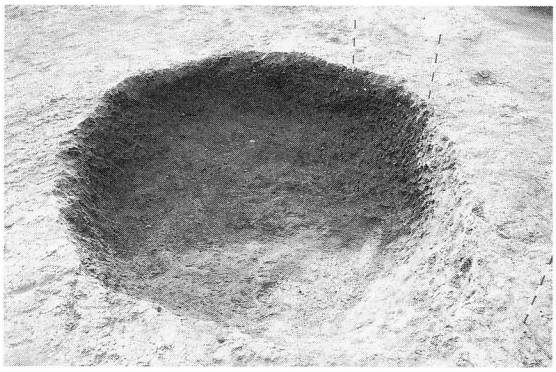


調査前



集石遺構 1

集石遺構 1 （半截）

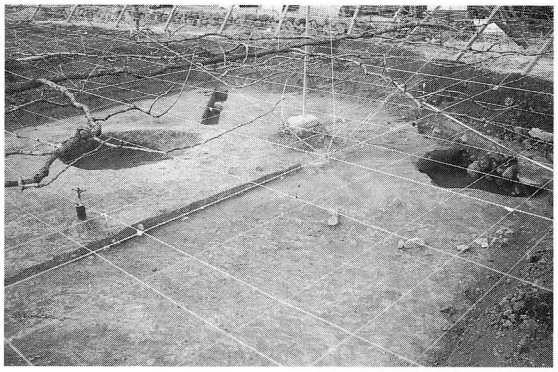


集石遺構 1 （完掘）

集石遺構 2

集石遺構 2 （半截）

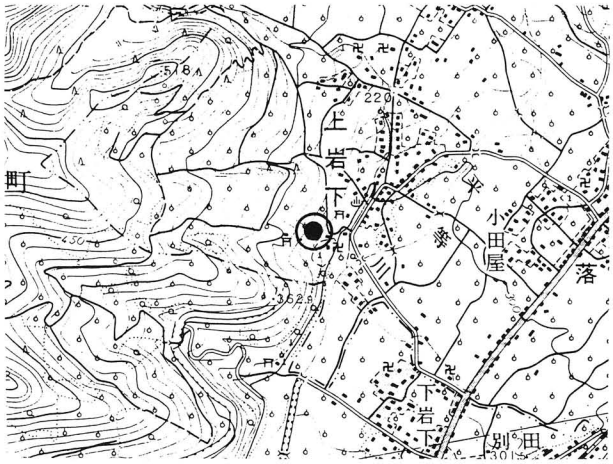
遺物出土状況



調査区全体

図版 7

第４節　牧洞寺古墳



所 在 地　山梨市上岩下 1,508－80番地
調査原因　古墳整備
調査期間　平成８年12月３日～平成９年３月31日
調査面積　255㎡
調査主体　山梨市教育委員会

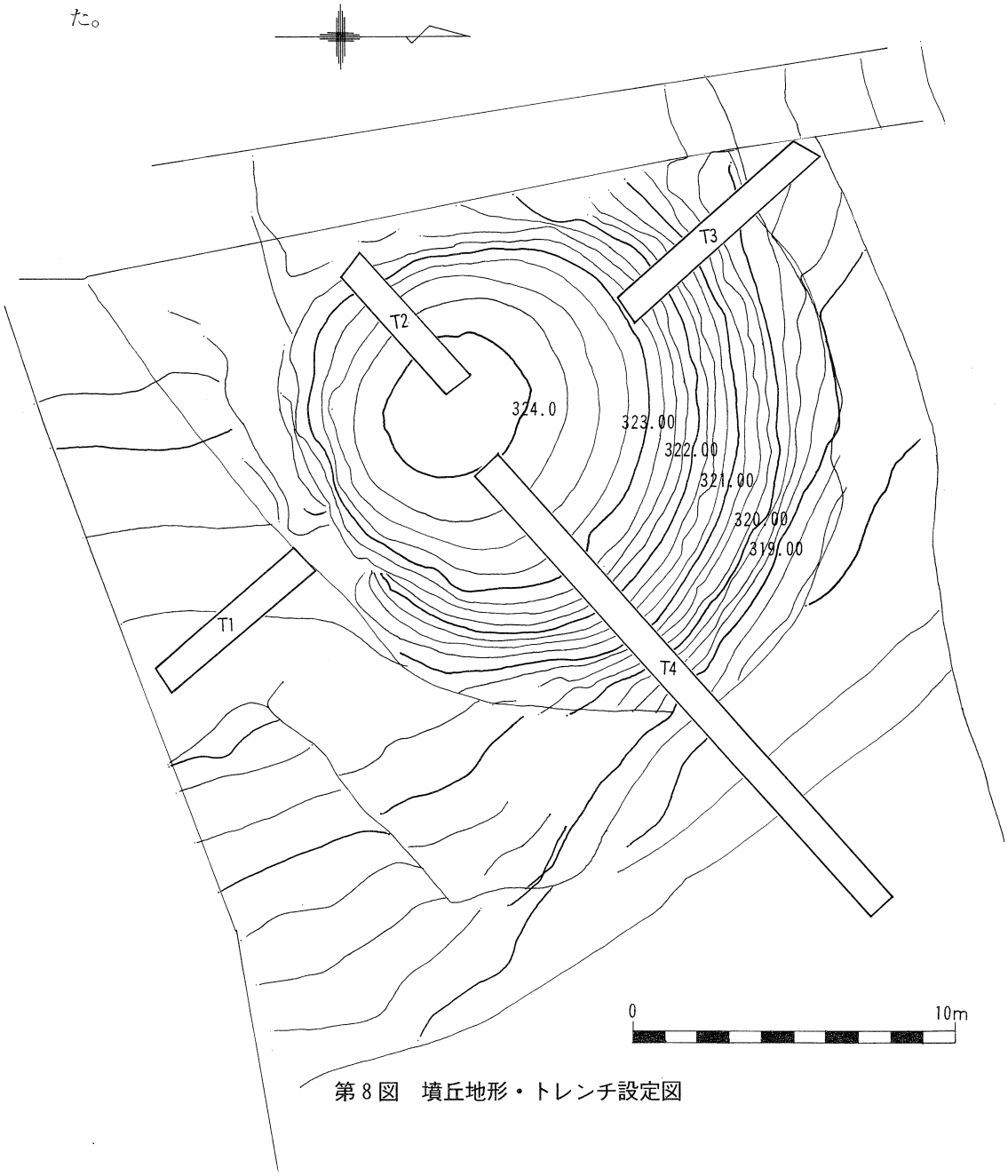
平成７年９月12日、山梨市上岩下の宗教法人牧洞寺代表榊原正浩氏より、墓地造成に伴い、寺名の由来にもなっている牧洞寺古墳を整備したいとの申請があった。牧洞寺古墳は、大型の横穴式石室を持つ円墳で、墳丘もよく残存しており、市の指定史跡に指定されている。また、墳丘部分は国有地になっている。県教育委員会の指導のもと、市教育委員会で検討した結果、提出された整備計画が学術調査に基づいて作成されたものではなく、整備によって文化財としての価値を損なう可能性があることから、学術調査を実施し、調査が完了するまで現状で保存するのが望ましいとの結論に達した。この結果を牧洞寺に説明し、現状で保存するよう指導した。しかし、近年になって墳丘を覆っていたぶどう棚を撤去して以来、土が自然崩落し石室の側石が内側に傾くなど崩壊のおそれがあるとして再度要請があったため、墳丘形態・規模・範囲等現況の確認調査を実施し、保存整備の基礎となる資料を得ることとなった。平成８年12月19日、文化庁に発掘届を提出し、12月３日より、調査を開始した。

牧洞寺古墳は、現況の直径約16mの円墳で、無袖型の横穴式石室を持つ。石室全長は10.6mを測り、県内では４番目に大きいものである。

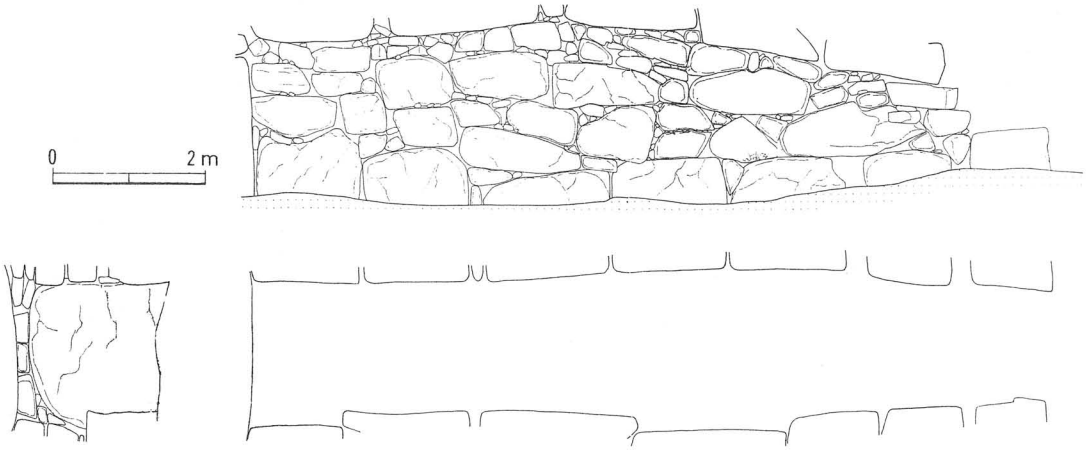
調査は、墳丘現況を１/100縮尺、25㎝等高線の地形図を作成するほか、墳丘に計４本のトレンチを設定し、葺石・裾石・周溝の有無の確認を図るとともに、土層観察・遺物採集を行うこととした。

その結果、墳丘の傾斜部分は、土は表面に薄く耕作土が載っているのみで、その下から全体的に石材が確認された。この石材は、当初葺石か耕作によるものかの判断がつきにくかったため、Ｔ２にサブトレンチを設定し、取り除いていったところ、深さ１mほど掘り下げた段階でも墳丘土が確認できず、段状の石積みが２段と、その下は拳大以下の比較的円径度の高い石材が詰まる形となっていた。耕作のために作られた土留めの石積みでないとすれば、石による段築が残存しているものとも考えられ、単なる葺石の残存とも考えに

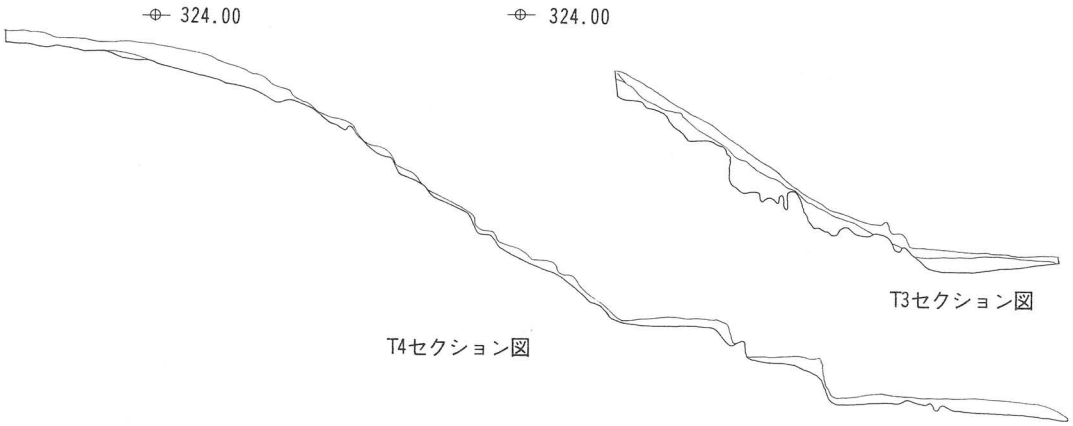
くい。また、当初耕作によるものと思われた墳丘周囲の平坦部も、薄い耕作土の下は拳大の石で覆われており、石の上面はほぼ同レベルで半周ほど周囲を巡り、これと同じような平坦部が2面みられる。本古墳は地山の傾斜を利用して造られたものであるため、傾斜からせり出すように造られた段築のテラスとも考えられる。また、墳丘上部の平坦面から傾斜変換する線にかけては、土層断面から墳丘土が確認でき、墳丘が鉢巻状に石で構成されていた可能性もある。いずれにせよ、現況確認を目的とした今回の調査では、予算と期間に限りがあるため、これ以上の拡張は困難と判断し、現状保存のまま、一時調査を中断した。



第8図　墳丘地形・トレンチ設定図

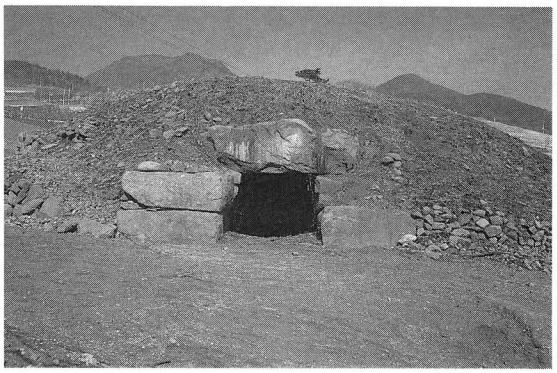


石室展開図（昭和53年作成）

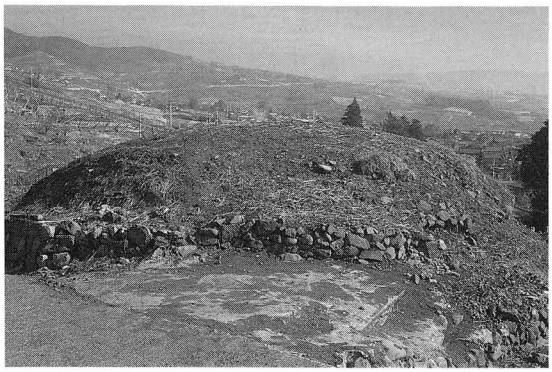


第９図　牧洞寺古墳石室・トレンチセクション図

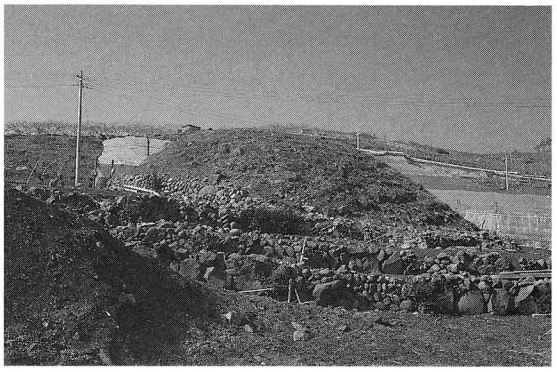
古墳遠景



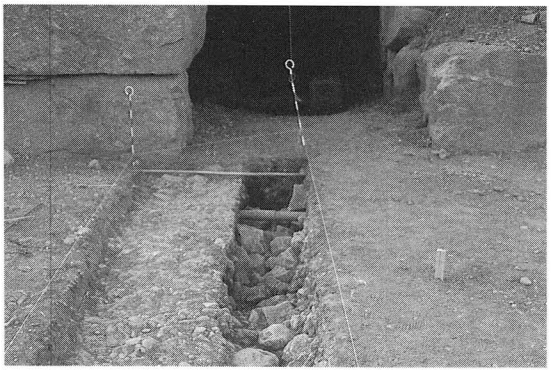
正面（南から）



側面（西から）



側面（東から）



Ｔ１（半截）

Ｔ１（完掘）

Ｔ２（半截）

Ｔ２セクション（墳丘上部）

図版８

Ｔ３調査前

Ｔ３（サブトレンチ設定後）

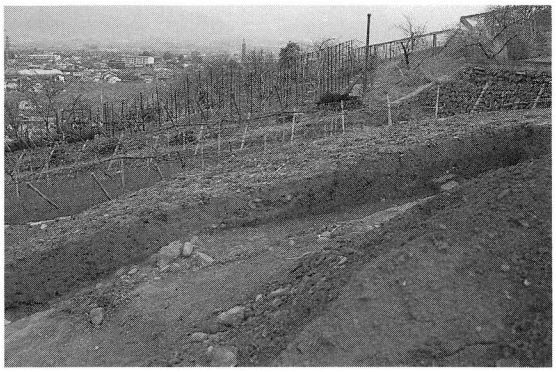
Ｔ３段状遺構

Ｔ３セクション

Ｔ４調査前

Ｔ４（表土除去後）

Ｔ４テラス



Ｔ４セクション（墳丘上部）

図版９

(1)　櫛原功一氏のご指摘による。

(2)　田代　孝氏にご教示いただいた。

引用・参考文献

『土地分類基本調査　御岳昇仙峡』1985　山梨県企画管理局土地水管理課

『日下部』1987　山梨市教育委員会

『荒神山』1987　山梨市教育委員会『宮ノ前遺跡』1995　山梨市教育委員会

『東後屋敷遺跡』1995　山梨市教育委員会

『武田信玄城と兵法』1986　上野晴朗　新人物往来社

『定本　山梨県の城』1991　萩原三雄他　㈱郷土出版社

報告書抄録

ふ り が な	やまなししないいせきはっくつちょうさがいほう
書 名	山梨市内遺跡発掘調査概報
副 書 名	
巻 次	
シ リ ー ズ 名	山梨市文化財調査報告書
シ リ ー ズ 番 号	第5集
編 著 者 名	三澤 達也
編 集 機 関	山梨市教育委員会
所 在 地	〒405 山梨県山梨市小原西955 TEL 0553－22－1111
発 行 年 月 日	1997年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
みやのまえいせき 宮ノ前遺跡	やまなししなのかいちば 山梨市七日市場1040	19205		35度 42分 24秒	138度 19分 20秒	19930817 ～ 19930913	105	分譲住宅
れんぼうやしき 連方屋敷	やまなししさんがしょ 山梨市三ケ所757	19205		35度 41分 21秒	138度 42分 24秒	19940315 ～ 19940331	144	個人住宅
うえだいせき 植田遺跡	やまなししいちかわ 山梨市市川895	19205		35度 42分 27秒	138度 41分 3秒	19960125 ～ 19960215	80	個人農地
ぼくとうじこふん 牧洞寺古墳	やまなししかみいわした 山梨市上岩下1508-80	19205		35度 40分 48秒	138度 39分 14秒	19961203 ～ 19970331	255	古墳整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宮ノ前遺跡		縄文・平安	溝状遺構	縄文土器・土偶	
連方屋敷	館跡	中世	集石遺構	内耳土器・常滑甕破片	
植田遺跡		縄文	集石遺構	縄文土器	
牧洞寺古墳	古墳	古墳	古墳	須恵器破片	

山梨市文化財調査報告書　第5集

山梨市内遺跡発掘調査概報

印刷日　1997年3月31日
発行日　1997年3月31日
発行所　山梨市教育委員会
〒405 山梨県山梨市小原西955
TEL 0553(22)1111
印刷所　毎　日　印　刷
〒405 山梨県山梨市上石森123